

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

命について学んだこと

(原文)

新田 早紀 (14 歳)

茨城県

茨城県立古河中等教育学校

私には自然という言葉を開くと思い出す風景があります。それはたくさんの魚が泳ぐ綺麗な川です。その川は私の家から車で 30 分程のところにあります。私がこの川を「自然」だと感じるのは、私がこの川で生命の重さを知った忘れられない思い出があるからです。

小学校に入ってすぐの頃、私はその小川で行われた鮎の掴み取りに参加しました。両親に勧められただけで気乗りしていなかった私もいざ始まると予想よりずっと速く泳ぎ回る鮎を無我夢中で追いかけてました。やっと鮎を隅に追いつめて捕まえた私は驚きました。水から出した途端ぐったりすると思っていた鮎がバネのように暴れ出したからです。体中の力をこめて一匹の小さな魚を潰れるんじゃないかというくらい握り締めました。慌ててバケツの中に放りこんだ後も暴れた鮎の弾力が手の中に残っていました。そのとき確かに、「生きたい」という声のない叫びが聞こえたような気がしました。

一時間後、捕まえた鮎が塩焼きになって帰ってきました。水をたっぷり含んで重たかった体がすっかりしなびて軽くなってしまったことが私にはとても大きな変化に思えました。そのとき、私はこの鮎が死んでしまったことを感じました。今まで何も考えず食べていた食物の全てが元はこうして生きていて、殺されてしまったのだと実感しました。

この体験から私は、食べ物に敬意を持って食べるようになりました。「残さず食べる」ことの大切な意味が分かったからです。

自然は、命を食べることの重さを教えてくれます。美味しい加工食品や手軽なインスタント食品などがあふれる現代で食べ物の命の重さに気付くことは少なくなってしまいました。しかし、自然に触れることは生命の大切さを感覚で伝えてきます。人の言葉だけでは伝えきれないことなのです。

自分の体を作っているものがほかの生き物の命だと知っている人は自分の命も他社の命も大切にできます。

自然は人が生きる上で大切なことを教えてくれるのです。